
界目（さかいめ）のない世界

溝森副露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さかいめ
界目のない世界

【NZコード】

N3946C

【作者名】

溝森副露

【あらすじ】

歪んでいく空間、人格。世界も人も崩壊する。現実か妄想か。意識を無視して導かれる

混濁1：彼女の死 - 1（前書き）

大量の虫等出てくる可能性があります。
グロ耐性がない方は読まない方がいいかと思います。

昨日、最愛の彼女が死んだ。電話で話した直後に死んだらしい。死因は不明。

一体何があつたのだろうか？棺の中の彼女はまったく綺麗な姿で、今にも目を覚ましそうなくらいだ。

屈託の無い笑顔、華奢な体、それから想像の出来ない強い心。彼女の持つている優しさ、自己というものは僕にとつて全て羨ましいものばかりで、同時に妬ましくもあった。棺おけの中で眠る彼女の隣では泣き続けたのか、腫れた「うさぎのような赤い」目をした母親が、その横に寄り添うように父親がとても小さくなつて彼女を見つめていた。

呼ばれて尋ねたものの、何も出来ることはなく現実すら受け止められない僕のせめてもの救いは、目の前で安らかに眠る彼女がこの辛い現実を生きることなく、静かに焼かれるのを待つことくらいなのだ。或る意味、そう思つことは自分を「まかす一つの「方便」と言つてもよかつた。

そうでもしないと受け入れられたくない現実、目の前の事実に心を碎かれてしまいそうだったから。静かに彼女の棺から離れ家の外に出ると、胸からチエリーを取り出し、静かに一服した。

「ねえ？たばこをやめようよ？」

いつも笑いながら火をつけたばかりの煙草を取り上げる彼女の幻を見ながら、ゆらゆらと空に立ち上つて消える薄紫の煙をただただ眺めるばかりだった。

「友君、ここにいたのね・・・。」

ボーッとしていたからだろ？か、いつの間にか横に彼女の姉が立っていたのに気づかなかつた。彼女と違い、”大人の女性”といった言葉が似合う感じのお姉さんは、まるで彼女と正反対で、彼女の母親はいつも僕に対して

”なんでサコリじやなくてトモコと付き合つてゐるのかわからないわ”

と冗談を言つてゐたくらいだ。姉のサコリさんに僕は

「正直、信じられませんよ。僕と電話した後だつていうじやないですか。何で・・・」

僕の言葉をさえぎるようにサコリさんは一切れの紙を見せ、愕然とする僕を無視して話始めた。

「今まで、一つの都市伝説・・・とでも言つたほうがいいのかな。こんなものがあるとは思つてもいなかつた。実際、あの子が作つたものかもしれない。でもね？こんなものを作つてまでして、人を悲しませたいとか思わないでしょ？きっと、どこかに犯人がいるんだわ。」

静かに、まるで言い聞かせるように語るサコリさんの話を右から左に聞き流しながら、紙に書いてある言葉を食い入るように眺めた。

”さかいめ 界目のない世界へよつ”

サコリさんが立ち去つたのにも気づかずに、紙を眺めていた。その紙からは作つた奴が異常にくらい嬉々としている姿が連想された。口に咥くわえたチエリーは綺麗に灰になつていて。これから肉体がな

くなる彼女を暗示するかのように。自らの重みに耐え切れず落下する灰を目の端で捕らえると、紙切れをポケットに仕舞い、携帯灰皿にフィルターを捨て、棺の前へ戻った。

彼女の棺の前に座り、顔を覗き込む。外傷は一切なく、本当に眠つているような綺麗な顔をしている。検死結果は、まったくの死因不明。発見された時、特に苦しんだ様子もなく倒れていたそうだ。眠る彼女の頬をそつとなぞると、蝋人形のように冷たいが、人間の肌の感触が伝わってくる。

「一体、何があつたんだい？」

寝ている彼女に話しかけるが、もちろん反応はない。電話を切るのが後五分遅ければ、だとか、電話ではなく会つて話していれば、なんて”もし”を持ち出して色々と考える。結局、今出ている答えが覆ることはないのに。肌の感触を手のひらに焼き付けるように頭をなでたり、頬を撫でたり、反応することのない手を握る。悲しいだと涙が流れるなんて事はなく、心に空いた穴がどんどんと大きくなつていいくばかりだ。

彼女の死体と遊んでいると、背後から彼女の母が声をかけてきた。

「ねえ、もし良かつたらこの子の持ち物を持つていいつくれないかしら？」

遊ぶのをやめて振り返ると、立ちくらみしているのか、壁によりかかつてボンヤリとこちらを見ていた。彼女を元通りに戻して立ち上がる。一階にある彼女の部屋へ向かうとまったく女の子らしい部屋がそこにあつた。

本棚には色々と雑誌やら漫画がならび、ベッドはシンプルにまとまっているが、大量のぬいぐるみが花を飾っている。グルリと見回した後、本棚の脇にあるCDラックからCDを物色する。洋楽やら

演歌やらポップスとまったくの関連性のないCDが大量においてある。一緒にいるときに見れなかつた一面をいまさら発見する。適当にCDを見繕つてもらつてその日は帰ることにした。

翌日の告別式も終わり、本当にもう彼女を見ることが出来るのは記憶と記録の中のみになつた。むしろ、そちらの方が綺麗な思い出だけが残るからうれしいと思う僕を自虐的に嘲笑した。

喪服を脱いで、タバコをつける。取り上げられないタバコに寂しさを覚える。ぼんやりとタバコを吸つていると、昨日貰つてきたCDを思い出した。CDラジカセとかそんなもんは持つていないので、PCを立ち上げる。立ち上がりまでの間に確認しなかつたアーティストを見る。

SOUL-d OUT ハ代亜紀 電気グローブ メタリカ ソナタアーケティカ

メタリカや電気グローブくらいなら分かる。ハ代亜紀にはさすがに笑つた。そうこうしているうちにPCが立ち上がつたので早速ドライブに突つ込む。再生される音楽。早口で何を歌つてているのか良く分からぬ歌やら哀愁を誘うような歌が思惟に流れ込んでくる。ベッドに寄りかかりながらタバコを吸つて垂れ流す。まったく違う人間から借りてきたような違和感を覚えて、同時に想像できない知らなかつた一面に殴られる。しばらくはCDを聞き続ける毎日になりそうだと思ったが、突然音が飛び飛びになる。

CDでも傷ついているのかなと思ったが、何か別の曲がバックで流れている気がした。とりあえず排出しようとドライブのボタンを押すが効かない。PCの不調かと思ったが、キチンとマウスは反応する。おかしい。何が起こつてゐるんだろうといぶかしんでいると、勝手にモニタのカーソルが動き出す。つつい一つとインターネットブラウザに向かい勝手にクリックされる。起動されるブラウザ。ネ

ツトには接続していないのでHラーが吐き出されるはずの画面に映し出される文字は

”界目がない世界へよひこ”

URLの表示窓にアドレスは記載されていない。なのに開かれたページ。

この間にか飛び飛びの音楽は別の曲へと移り変わっている。

”ドロリと一つ 界目がない世界”

ブラウザに開かれたページからも同じ曲が流れる。再生されていった音楽とズレズレ流れ、頭がおかしくなりそうになる。スピーカーのボリュームを絞る、まだ再生される。スピーカーを抜く、まだ再生される。どうにかなってしまった。そう思つと何時の間にか意識は遠のいていた

混濁2・トモコ

飛んだ意識が戻ったのは、窓から差し込む朝日で鳥のさえずりを聞いてからだつた。キーボードに顔面をうすめるようにして氣絶していたようで顔中が痛い。テーブルの上の手鏡を取つて確認すると酷くでこぼこがついている。思い切り叩きつけたようだ。昨日再生していたハズの音楽は止まつていて、そもそもパソコンすら起動されていなかつた。

ヒリヒリと痛むでこぼこを擦りながらキッチンの扉を開けると、彼女のトモコがコーヒーを作つてゐるところだつた。一瞬、ショックから来る幻覚だと思つた。そりやそつだ、昨日確かに骨になつたはずだからだ。

「ん？ 友君おはよう。顔酷いよ？」

マグカップに入れたコーヒーを突き出しながら顔のことを笑つてくる。

「え？ いや？ え？ 誰だよ？ お前誰だよ・・・。トモコは確かに昨日・・・。」

錯乱状態で問いかけると、トモコは「酷いな。殺さないでよ」と笑う。殺さないでよじやない。確かに死んだのだ。喧嘩して電話を切つた後、誰かに殺されたのだ。本当に何が起こつてゐるのかわからなくなる。目の前の現実が、決して眞実ではないような感覚が襲つてくる。じつはトモコじやない。

「お前はトモコじやないだり？ 誰だよー。昨日お前は死んだんだよー！」

声を荒げて伝える。キヨトンとして理解出来ないといった顔をするトモコ。荒げた息がハアハアと静かな空間に聞こえるだけの沈黙が流れた後、トモコ”のような奴”は、ニコリと笑った。そして、次の瞬間にほけたたましい笑い声を響かせる。

「アハハ。アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

狂つたように笑い、目が常軌を失う。グニヤリと歪んだ顔は何かに憑依かれているようで、得体の知れない恐怖をかもし出している。ひとしきり笑つた後、ぷつりと声が途絶えた。さつきまで歪みきつっていた筋肉は伸縮を止め、能面のよつなベットリとした恐怖に変わつた。

死んだ魚のよつた目で僕を見つめてくる。動けない。ソイツはゆつくりと首をかしげると、口元だけがニヤリと歪み、その状態で静止する。それは想像を超えた恐怖。そしてゆつくりと歪んだ口元がパクパクと動いて、その動きから遅れて声が発声される。まるで腹話術のようだ。

「何ヲ言ツテルノ？ワタシハともニダゾ？」

アクセントのないペラペラの台詞。迫真の演技でした。といわれたらどれだけありがたいだらう。決してそんな事はないのに。背中にはベツトリと汗をかき、額は脂汗がじとりと張り付く。

身じろぎしたら殺されるような恐怖が何分続いたか分からない。体感的にもう一時間はこいつと見詰め合つていてるような気がする。目を見開いたまま口も動かせないでいる。そいつは「うふふ」と笑いながら玄関に向けて後ずさりを始める。ズルリズルリとフローリングを素足が擦る音が静寂を占拠する。そのまま玄関まで到達す

ると、後ろ手にドアノブを捻り、ウネウネと動くように出て行った。とても静かにドアが閉まり、外から力チヤンと鍵が閉まる。

しばらくは身動きが出来なかつた。体中の筋肉が硬直し、このままの体勢を強要する。呼吸も何もかも自分の意思で確認できない。しばらくすると耳にキーンと劈く耳鳴りが聞こえ始め、視界がゆがみだす。そしてやつと自分が呼吸していないことに気がついた。

ブハツハアハアと急速に酸素を吸収しようとする。呼吸でおぼれそうになりながら転がるように部屋に戻ると爆音でCDが再生される。パソコンの電源は入つていない。昨日気絶した瞬間のような現象に、またも体が動かなくなる。

四つんばいの姿勢のまま目だけを動かす。確かにパソコンは起動しておらず、スピーカーも死んだまま。何処から鳴つてる？何処から。半ばパニックになりながら音源を捜すと、ベランダに人影が一つ。

「ヒツ」

人は恐怖の絶頂に達すると悲鳴すら上げられないことを知る。先ほど部屋から出て行つたはずの能面女がベランダからこちらをのぞいている。目が血走りまるでウサギの様な赤い目で。

顔をグリグリと押し付けて、右に倒し、左に倒し、車のワイヤーのように等間隔で頭を振り動かす。ジイーっとこちらを見る目は空ろで決して僕を見ていいかのように中空を見つめる。

姿勢が姿勢なので、体中の筋肉がガクガクと躍動を始める。全体に及んだ振動はプルプルと僕の体を振り動かす。もちあげた頸からぽたりと汗がたれ、喉がカラカラに乾いて声すら出ない。

どうにか姿勢を変えようと腕を動かすとビクリと右肘が折れ、右に傾く。ドスンとこつけいな姿で倒れた僕を見て、ソイツはちょうど真ん中で頭のムーブをやめる。2秒ほどの静止の後、ゆっくりと左に頭を傾けるとまた、けたたましく笑い出した。

さつきはゆがみきつていた顔も、今度は能面のままだ。赤い瞳でこちらを見たまま両手を顔の横に持つてきて窓をバンバンと叩く。打ち破れそうなくらいガタガタと歪むガラスはこちらに激しく飛び散つてきそうだ。ソイツは激しい笑いの中に

「ワタシがモードだよ。モード。あなたのモードだよーーー。」

と、自己主張を織り交ぜてくる。否定しないにもぴくりとも口が動かない。狂ったように「トモロ、トモロ」と連呼しながら、窓ガラスを叩く。バンッ！と両の手を激しく打ちつけ窓ガラスが飛び散った。進入してくるのだろうかと思つたが、また笑うのをやめ、能面に戻る。

ヌーウと顔を突っ込んできた後、ゆっくり「ト・モ・ン」と発音して、またズルズルと引き下がる。アパート3階のベランダの敷居にぶつかるとひっくり返るようにクルリと頭を下にして落下していった。

ドサリと音がなると、体の緊張も一気に解ける。僕は何を思ったか、飛び散ったガラスを踏みながらベランダへ駆け出した。下を覗くと落ちたはずのトモコはどこにもおらず、跡形もなく消えていた。僕は自分の意思とは関係なく、下を覗いた体制のまま、ゲエエエと吐瀉物を落としたと思われる地点へ吐き出した。

眞面目な・口吃（おんじやく）

「さきほこです。」

周囲500mを封鎖して、特殊処理班が作業をしている。キープアウトのテープをぐるりとすると、化学防護服の着用を促される。

「すいません。まだ処理が終わらないんで。」

「そんなに酷いのか？」

「ええ、なんせ数が数ですからねえ…。この辺一体を火の海にしたほうが早いくらいですよ。」

差し出された防護服を気ながら、担当者を会話を交わす。

一日前、現場アパートの住人から大量のゴキブリが沸いていると保健所に連絡があり、同時に管轄署へも異臭がするとの連絡があった。実際現場に駆けつけた人の話によると、おぞましいほどゴキブリが居たそうで、黒い壁が力チャクチャと音を立てていたらしい。聞くだけでもぞっとする現場へこれから向かつ。殺虫剤なんて生ぬるい処理ではなく、火炎放射にバキューム処理といった大量かつ迅速な処理のおかげで今は大分マシらしいが、室内は一体どうなっているのか分からぬうそうだ。

防護服を着付け、ヘルメットを被るうとすると、先に防毒マスクの装着を言われた。

臭いがトンでもないからだ。そりやそりや。500mほど離れているとは言え、ここまで臭いにおいが流れているのだから。

現場へ向けて担当者と一緒に向かう。そこら中で山狩りの如くゴキブリ駆除をしている。億単位か国家予算レベルの量が沸いてるんじゃないだろうか。

「いや駆除したとしても、住んでた人間は皆引っ越すだろうな。」

自分でも聞き取りづらいくもつた声が聞こえる。

隣を歩く担当者は、「そりやそうでしょうね。」と他人事の返事を返してきた。結構冷たい奴なんだな。なんて思いながらズコズコと音を立てて進む。アパートが見えてくると、特殊処理班の警察官なのか区別のつかない集団がアパートに取り付いて作業をしている。マスクを着用しているにもかかわらず、においてドンドンと鼻をついてくる。例えるならアンモニアを直接かいだよつに鼻がツンとする。

「鼻血が出るぜ。その前に吐くなこりや。」独り言を呟いて歩き続けると、向こうから同じ格好をした人間が駆け寄ってきた。自分の目の前に立つと軽く敬礼をする。いらっしゃんと手を振ると態度を軟化させて抱きつくように身を寄せてくれる。

「これ着てたらいいしないと良く聞こえないんですよ。」

顔の前の窓からみえる相手の顔は皮肉っぽく笑っている。

「で、どうしたんだ?」

「いや、今部屋の中に入れようつになつたんですけどね、日記が見つかりまして。」

「日記? 日記になんか書いてあるのか?」

「はい。すいませんが、もつかに向つへ行きましょつ。」

糞暑い上に重たい装備をして目の前まで歩いてきたのに、また戻

る」となつた。「こんなことをしばらく続けないといけない」と思つと、「気が滅入る。一緒に来た担当者は「じゃあ、仏さん回収に言つてきます。」と悪魔の巣へと行つてしまつた。すでに感覚が麻痺していふんだろうか。頭がおかしくないと出来ないんだろうな。と思つた。

日記を持つてきた奴を連れて結界の境界線まで戻る。一応防護服の消毒を受けた後、防護服を脱ぐ。においを嫌つて防毒マスクだけは外さない。いそいそと脱いで付近の人間に防護服を返すと、境界線の外に止めてあるワゴン車へと乗り込んだ。

「おい、そいつは消毒済みか?」

「ええ、さつきしてもらいましたよ。これ書いた奴は頭おかしいんでしょうね。」

「滅多な事はいふなよ。どれどれ。」

差し出された日記を受け取り、パラパラと捲る。日記は7月から書き始めたようだ。確かにパツと見だが、異常性が感じられる。そこまで「キブリが沸く理由が分かるといいが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3946c/>

界目（さかいめ）のない世界

2010年11月24日05時44分発行